

# 霞会館記念学習院ミュージアム ミュージアム・レター

KASUMI KAIKAN MEMORIAL  
GAKUSHUIN MUSEUM  
霞会館記念 学習院ミュージアム

## Museum Letter No.58

発行日 ● 令和8年(2026)3月14日

もくじ

ごあいさつ／辻邦生生誕100年展に寄せて	1
書斎、あるいはこころ安らぐ「聖域」	2～3
辻邦生の書斎— 創作を支えた空間の変遷	2～3
義兄・辻邦生の思い出	4



生誕100年展「Part 1 Re: 辻邦生 — いま、ふたたび作家に出会う」

### ごあいさつ

霞会館記念学習院ミュージアム館長の荒川でございます。

この度の展覧会、「生誕100年Re: 辻邦生——いま、ふたたび作家に出会う」は、我が学習院大学の文学部フランス文学科(現フランス語圏文化学科)で教鞭をとっておられた辻邦生先生を偲ぶ内容となっています。

辻先生のキャンパスライフは常に学生たちと共にあり、じつはテニスがお好きな先生は、テニス同好会(オッター)の顧問もなさっておられました。

現在のミュージアムは、以前は大学図書館の建物でしたが、辻先生は調べものをするために、ちよくちよくこの建物に足を運ばれておられました。つまり、ミュージアムは辻先生所縁の場で、この度の展覧会が開催されることは我々学習院の者たちにとって、とても光栄であり、再び辻先生と出会える貴重な空間ともなるのです。

是非、多くの学生諸君、そして卒業生の皆様にもお越しいただきたく願っております。

史料館長 荒川正明

### 辻邦生生誕100年展に寄せて

辻邦生生誕100年記念事業組織委員会委員長  
学習院大学名誉教授

中条省平

昨2025年は、辻邦生の生誕100年に当たり、各種展覧会が開催され、記念アルバムや小説選集が刊行されました。今年も引き続き、辻邦生の人と文学について新たな切り口を提示する催しが開かれます。

本展覧会「Re: 辻邦生——いま、ふたたび作家に出会う (Part 1)」は、そうした辻邦生の再発見を誘う試みのひとつです。

「Part 1」とあるとおり、この展示は、作家生活をしながら学習院大学に教師として勤めた時代を主に取りあげる「Part 2」に先立ち、若き日の辻邦生に焦点を当てます。

まずは、生地・東京を去って信濃に行き、旧制松本高校で学んだ時代がクローズアップされます。このとき辻は19歳から24歳という青春の盛りでした。辻自身この時代を〈永遠の夏休み〉と呼び、特別な愛着を示しています。19歳で書いた「遠い園生」は辻邦生の最初の創作であり、読者はそこに描かれた孤独な少年の内省に辻文学の出発点を見出すことでしょう。

しかし、〈永遠の夏休み〉は、戦争で破壊され、生まれ故郷・東京は廃墟となります。この美的現実の崩壊によって惨憺たる青春後期が始まります。この時期、辻は東大仏文科に通うと同時に、自動車業界の記者・宣伝係として社会生活を始めています。その20代後半の文学と生活をめぐる苦闘は、歴大な「Journal(日記)」14冊に生々しく記されています。

この生活ががらりと転換するのは、後藤佐保子と結婚し、ともにパリで暮らした留学生時代です。辻邦生は32歳から35歳になります。パリでは日本の苛酷な現実から脱けだし、ギリシアはじめヨーロッパ各地へ旅をし、思うままに文学についての思索を深めることができました。「遠い園生」以来中断されていた小説創作への道が開かれるのです。

ある春の夕方、セーヌ河にかかる橋の上で、世界と美と〈私〉の一体感という啓示に打たれた辻は、南仏ニースで見た城のイメージを脳裡に呼びおこしながら、酔ったように小説を書きあげます。それが短篇「城」です。けっして行きつくことのできない城の話でありながら、そのはらかな城のような、理想の情感的イデーの存在を確信する者の充足感が、そこには漂っています。

さらに初長篇「廻廊にて」は、ロシア人女性画家の物語ですが、戦争の惨禍と虚無の脅威を芸術の力によって生きぬくひとりの人間の記録であるという点において、辻邦生の分身の生を描く作品でもありました。

かくして、本展覧会は、小説家・辻邦生の誕生を見届けるものとなります。

# 書齋、あるいはこころ安らぐ「聖域」

辻邦生は「ピアニストがピアノを弾くように」絶えず書く人だったが、同時に、「絶えず読む人」でもあった。旧制松本高校時代に、勤労働員で防空壕を掘っていた時に、係の教官がいなくなるやいなや作業をやめて、一心に岩波文庫を読み始めた姿を見て、「松高には化け物がいる」と北杜夫は思ったという。

寸刻を惜しんで本を読む習慣は、いつからなのだろう。この世に生まれたその日から、琵琶奏者だった父親の語る平家物語や太平記を耳にし、寝る前に母親がアルス児童文庫を読んでくれたことが、日本語のリズムや物語への愛着に繋がっていることは、辻自身が認めている。

小学校に入る頃には早くも「本を読む楽しさ」に目覚めて氷川図書館の児童閲覧室に通い詰め、少年冒険小説などを手あたり次第に読んだ。3年の頃には、こんなに楽しく面白いものを自分でも書いてみたいと子供なりに思ったという。

中学生になると、漱石、鷗外、有島武郎、芥川などはすべて全集で読み(気に入った作家は断簡零墨に至るまで読まなければ気が済まなかった)、また当時の旧制高校生のバイブルだった倉田百三や阿部次郎、河合栄治郎などもすでに読んでいる。

高校から大学にかけては、トーマス・マン、トルストイ、ドストエフスキー、さらにバルザックやブルースト等々、外国文学を耽読した。

このような状態だから、新婚時代の国分寺の自宅から始まって、高輪のマンションの自宅、パリ・デカルト街のアパートマン、軽井沢の山荘、そして同

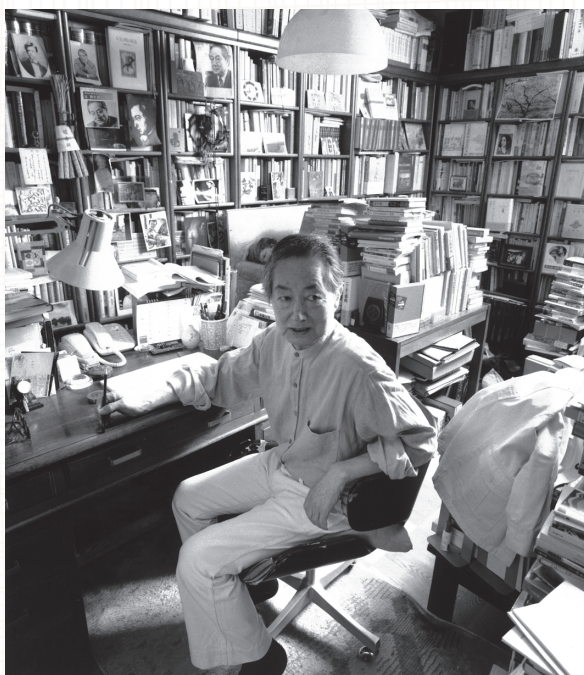
じ高輪のマンション2階の書齋に至るまで、辻邦生の行くところ住むところ、たちまち本で溢れかえった。

しかし、最後のワンルームの書齋だけは、他の部屋とは明らかに異なる雰囲気を持っていた。他の部屋が、その時々に関心や必要に応じて買い求めた書物が、洪水のように生活空間の中に押し寄せて来た感があるのに対し、この書齋は最初から、執筆と読書のためだけの、「生活」とは切り離された一室だったからである。

いつも手許に置いておきたい愛着のある本、今書いている作品のために必要な資料、これからの執筆に備えて出番を待っている参考資料等々が、天井まで届く二重の書棚にうずたかく並べられているこの部屋は、半世紀以上に亙る読書遍歴、思想遍歴が凝縮されていて、辻にとって特別な意味を持っていた。

そのことを実感したのは、初めて書齋を訪れた時である。ドアを開けた瞬間、ほんの一瞬ではあったが、私は思わず立ちすくんでしまった。「書物の霊」とでもいうべき一種の「気」が立ち込めていて、圧倒されてしまったからである。入口でいきなりトーマス・マンの写真に迎えられたせいかもしれない。あるいは、ほの暗い室内の、斜め右前方にある仕事机の上の卓上ライトが、ぼうっと黄色く光っていたせいかもしれない。

いずれにしても、そこは扉一枚によって外界からは完全に遮断された「異界」だった。机の前に座っているこの部屋の主の、いつもの温和な顔を見て、ようやく安心したのを覚えている。数歩の距離ではあ



辻邦生(71歳)平成8年(1996)6月 高輪の書齋にて 書棚の随所に好んだポストカードや作家の肖像写真が貼られているのが見える

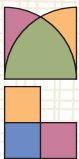
## 辻邦生の書齋— 創作を支えた空間の変遷

学芸員 富田ゆり

当館では、辻邦生の原稿や蔵書、書簡、写真などの調査を進めるなかで、作家の創作がどのような環境のもとで行われてきたのかにも注目してきた。

そうした過程の中で浮かび上がってきたのが、辻にとっての〈書齋〉という空間である。辻は、生涯にわたり日本とフランスを往き来し、住まいを移しながら、小説の執筆と文学研究を続けた。国分寺の家に始まる書齋は、高輪、そして軽井沢へと受け継がれ、創作が円熟へと向かう時期を支える場となった。

パリ、東京、軽井沢——それぞれの地に設けられた書齋は、辻にとって思索と執筆のための場であり、生涯を通じて欠かすことのできない存在であった。それぞれの住まいに残された蔵書や資料は、辻が何を読み、どのように考え、どのように〈知〉を積み重ねていったのかを今に伝えている。



るが、その机まではまっすぐには行けず、右側の書棚に沿って正面の書棚まで進み、左折して辿り着くと、わずかなスペースに、背もたれのない小さな椅子が置いてあった。

机の前の正面の書棚には、最も大切にしている本が収められているに違いない。日本語の本より、ドイツ語、フランス語、英語のほうが目につく。一番目立つところにあるトーマス・マンのコーナーの中に、パリで一節一節をカードに取って文体の秘密を探ろうとした『ブッデンブローック家の人々』はあるのだろうか。「ページに身をこすりつけるようにして繰り返し読み、筆写した『失われた時を求めて』のプレイヤッド版」や、パリで佐保子夫人に急遽送らせ、それが届いたときには「神の恩寵のようだ」と喜んだシェークスピア全集はどこだろう。リルケやディケンズ関連の本も数多く見受けられる。

それとなく周囲を見回してみると、文学書だけでなく、哲学、歴史、美術、社会科学等々、その守備範囲の広さにも驚かされた。

ここに辻邦生の作家としての長い道のりが凝縮さ

れ、さまざまな思いがしみ込んだ本が並んでいる。そう思うと身の引き締まる思いがした。辻は毎朝ここにきて、これらの文豪たちと朝の挨拶を交わり、会話していたのではないか。そう思う程、これらの本と辻邦生の間には旧友同士のような親和感、一体感があった。

辻は稀に見る読書人だったが、稀覯本や豪華本の蒐集家ではなかった。しかし、本には所有するという快樂もあると語っているように、一度読んだ本を処分することはできなかった。そのためこの書齋も、あつという間に、カニ歩きでなければ移動できないほど本で埋め尽くされることになった。しかしこれは、本に埋まって暮らしたいという幼いころからの夢でもあり、「本来の自分に戻り、心がいきいきと目覚める『くつろぎ』の場」でもあった。心の唯一の充実は「孤独の中での読書と執筆」と述べているように、この書齋で過ごす時間こそが、最もこころ安らぐ至福の時であり、佐保子夫人でさえめったに入ることができない「聖域」だったに違いない。

## PROFILE

## 笠松 巖 Iwao Kasamatsu

元中央公論新社書籍編集局長、中央公論事業出版社長、辻邦生誕生100年記念事業組織委員会委員。

昭和16年(1941)、樺太に生まれ、終戦後北海道に引き揚げる。昭和41年(1966)、東京大学文学部卒業後、中央公論社に入社、主に文芸関係の書籍編集に携わる。辻邦生とは、対談集「灰色の石に坐りて」(昭和49年(1974)刊)が初仕事で、完結まで15年を要した「ある生涯の七つの場所」などの編集を担当した。辻邦生没後の平成12年(2000)に発足した「辻邦生小委員会」の学外委員となり、新潮社版「辻邦生全集」(全20巻)の全巻解説、著作年表、書誌を作成した。退社後、「中央公論新社120年史」を執筆した。

## 東京・国分寺の家

昭和28年(1953)  
～昭和46年(1971)

佐保子(初期キリスト教美術・ビザンティン美術史研究者)との結婚を機に、辻が初めて手にした住まいである。設計を手がけたのは、当時建築科の学生であった弟・愛也だった。

はしごのような階段を上った二階に夫妻の書齋があり、二人は同じ書棚を分かち合いながら、読書と研究、そして創作の時間を重ねていた。

この書齋で『廻廊にて』『夏の砦』『安土往還記』といった初期の代表作が書かれ、作家・辻邦生の出発点となった。

## 東京・港区高輪のマンション

昭和46年(1971)  
～平成11年(1999)

六階の窓からは、房総半島の稜線や羽田空港を飛び立つ飛行機が臨めた。当初、夫妻は住まいの中の二つの小部屋をそれぞれ書齋として用いていたが、昭和57年(1982)、辻は二階に新たな書齋を得る。そこは、執筆に集中するための特別な空間となった(左写真)。高輪の書齋は、辻の成熟期を支え、多数の作品が生まれ出された重要な創作の場であった。

## パリでの初期滞在

昭和43年(1968)  
～昭和55年(1980)

辻は昭和43年(1968)以降、カルチェ・ラタンのホテルやモンマルトルのアパルトマンを転々としながら、パリでの生活を続けた。定まった住居を持たない流動的な滞在のなかでも執筆は続けられ、この時期に『背教者ユリアヌス』の連載が開始されている。

こうした滞在中、辻はやがてパリ市内に拠点を選んだ。

## パリ・デカルト街37番地のアパルトマン

昭和55年(1980)  
～平成6年(1994)

サント・ジュヌヴィエーヴの丘に位置するこのアパルトマンは、その後のパリ滞在中の拠点となった。表通りにはレストランや商店が並び、生活の気配が常に感じられた。

書齋には古い木材の梁と粗石の壁が残り、内庭には桜の木があった。隣接する建物には、かつてヴェルレーヌやヘミングウェイが居住していた。

この環境のもとで、辻は継続して読書と執筆に取り組み、長編作品を創造していった。

## 軽井沢の山荘(磯崎新設計)

昭和51年(1976)  
～平成11年(1999)

辻は東京から自ら車を運転してこの山荘へ通い、主として執筆のために用いていた。親族や編集者でさえ容易には立ち入ることのできない静かな場所であり、限られた親しい友人を迎えることもあったという。

書齋机には、辻の急逝によって書きかけとなった原稿「のちの思いに」が残されている。晩年、辻は窓から森に埋もれる谷を眺めながら、静かな時間を過ごしていた。



私が最初に義兄にお会いした時期は、日建設計の先輩の愛也（辻邦生の弟）と結婚し、長女の出産のため、国分寺宅で義両親と同居して居た頃です。ちょうど義兄がフランスの留学先から帰国した時期だったかと思います。日常生活のなかで話をする機会は少なかったのですが、机に向かって静かに本を読んで居る姿を目にすることが多かったことを特に覚えています。その光景が強く心に残っているため、国分寺宅は義兄との出会いと思い出の場所となっています。

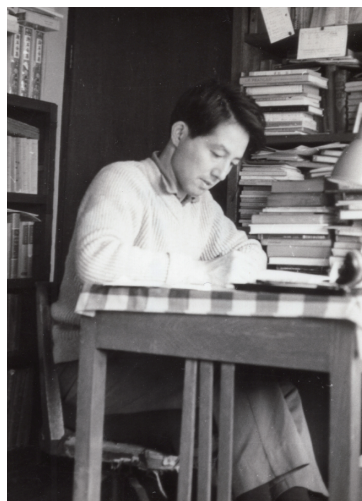
ある時、読書が好きだと何気なく話したことが元で、義兄から私の自宅に『世界文学全集』五十二巻が送られて来ました。その後、間をおいて再び、『室生犀星全集』、『谷崎潤一郎全集』も届けられました。

これらを読み始めた時期は、ちょうど自身の生活の仕切り直しを考えていた頃と重なっており、私を再び本と向き合わせるキッカケともなりました。読み進めていくうちに、物語の面白さに心が満たされることが多くありました。「最後まで読み切る」という思いにつき動かされ、その経験がのちの私の生き方を支える大きな力につながっていきました。

その後、義兄の本が次々に出版されました。二児の子育て中でしたが、時間の許す限り、すき間を縫って、読むことに熱中しました。体験したことのない世界がぐんぐんと広がっていく不思議な力に惹かれ、読むことそのものが何よりの楽しみになっていきました。

その後は、何事にも興味や好奇心があれば挑戦し、人とも積極的に関わりたいと思うようになりました。気の合う仲間とつき合いを深くしたいと思い、その機会を少しずつ得られるようになりました。こうした経験の積み重ねが、社会とつながる大切な糸口になったと感じています。

1970年2月のある日、義兄が「近くまで来たので」と言いながら、フラッと一人で我が家を訪れたことがあります。ゆったりと椅子に腰をおろし、一息ついた頃には、ちょうどお昼を過ぎていました。「お腹が空いてしまって、何か食べたいな」とおっしゃったので、軽いサンドウィッチと紅茶をお出しました。



辻邦生(37歳) 昭和37年(1962)頃  
東京 国分寺自宅2階の書斎にて

その間どんな会話を交わしたか……おそらく日常のささやかな話題だったように思いますが、確かな記憶は残っていません。用事がありだったようで、「ごちそうさま」と一言残して帰られた時の相手の気持ちをなごませるような優しい眼差しは今でも強い印象として心に残っています。

また、義兄夫妻が軽井沢の病院に入院され



昭和42年(1967)、西荻窪のフランス料理店「こけし屋」にて  
手前左より母キミ、姪砂織、父靖剛、姪愛里、義弟玉井龍象、  
後列左より弟愛也、筆者、妻佐保子、辻邦生(42歳)、妹玉井禮子

ていた折、「歴史的な建物があるので、ぜひ見てらっしゃい」と、入院中にもかかわらず、見舞いに訪れた私ども夫婦に細やかな心遣いの言葉をかけてくださったこともありました。

義兄たちが勧めたその建物「旧三笠ホテル」は、木々の静かな佇まいの中にあいました。自然に抱かれるようにして現存するその姿は、当地の長い歴史の中で守り継がれ、まさに“あるべき場所にある”という印象を強く受けました。義兄たちが勧めた意味がわかったような気がしました。周囲との景観とともに心に残り、興味も楽しみも一層豊かなものとなりました。

長い道のりを経て、ようやくここまでたどり着きました。遠い過去の思い出は、私にとって、現在の生活以上に深い意味をもつものでした。いつも遠くから見つづけてきた義兄夫妻からは、実に多くの影響を受けました。その心ざしの高さは、そのまま二人の生き方を表していたように思っております。

## PROFILE 辻 皐月 Satsuki Tsuji

昭和10年(1935)、東京生まれ。リルケ詩集をはじめ文学書に親しむ少女時代を送る。日建設計入社後22歳で社内結婚。建築家として活躍する夫愛也を支えるべく同社を退職し主婦として育児、家事に専念。毎晩子どもが寝静まってから読書を続け、文学全集を読破した。源氏物語の輪読会「ひいらぎ会」に20年以上参加し、文学と歴史、古典文学の楽しさにも目覚める。民芸、陶磁器も愛好する。

## 予告

令和8年(2026)6月23日(火)～8月1日(土)  
Part 2「Re: 辻邦生 —— 作家をめぐる人と世界」開催!

ミュージアム・レター第58号

令和8年(2026)3月14日発行  
〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1  
電話 03(5992)1173  
FAX 03(5992)9219



KASUMI KAIKAN MEMORIAL  
GAKUSHUIN MUSEUM  
霞会館記念学習院ミュージアム

<https://www.gakushuin.ac.jp/univ/ua>